

(二) 左の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ときどき無性に独りになりたいということに大きな理由はない。今の自分の位置を確かめ、進むべき道を考える、独りになることで、そのための羅針盤^①を準備するなどは、自分に対する言い訳にもならないが、子どもの頃、独り教室の外を見ながら、窓から広がる空や海を背景として、心象風景を空想のまま旅することは好きだった。小学校の教室の窓からは、すぐに海が見えた。晴れた日には遠く四国の山並み^②を望むことができた。海を渡る風は直接校舎に吹きつけ、窓を揺らした。そうした風には、春のやさしい風もあれば、夏の潮風も、秋の爽やかな風も、そして冬の木枯らしのような風もあった。校庭がそのまま海につながる海辺の小さな小学校だった。

小学校へ入ったばかりの頃の昼休み、だれが言い出したのかはわからないが、海岸に出て、午後の鐘が鳴るのも知らず、浜辺で貝拾いに夢中になったことがある。集団で行方不明になった一年生に先生たちが慌てて辺りを探し回った。「全員がいなくなつたのですからね」と以前、母から聞いたことがある。かすかな記憶はある。心配顔の先生を前に一年生全員が泣いている。そんな光景が記憶に残っている。青い空と海が子どもたちの泣き顔に重なるが、それがその日の本当の記憶なのか、母の話を聞いた後年、わたしが想像で作りに上げた記憶なのかは、今となってはわからない。

通った小学校は、生徒数が一年生から六年生の全校生徒を合わせても一〇〇人を少し超えるほどで、入学の時の同級生は一七人だった。担任になった女の先生は「みんなは三十四の瞳^③ですね」とよく言った。それがみな保育所から一緒に、〇歳あるいは一歳から一緒に過ごした仲間とはときに兄弟姉妹のようで、町全体が一つの擬似家族のようでさえあった。居間に続く縁側が海へ延びる小さな道路に面し、引き戸を開けると道から家の中が丸見えになる漁師町の家々は、祭りや盆の夜には大きくその戸を開け放ち、道行く人々――それは地元に移らす人だったり、都会からの帰省者だったりしたが――に酒や肴^④を振舞った。子どもも例外でなく、スイカやジュースが勧められた。「どこの子だ？」という家人の問いに「磯太郎さんところの孫ですよ」と別の家人が答え「そうか、磯やんところの孫か」と祖父の名前が出たりすると、それで身元確認は終わった、そんな関係性が残っている

る場所だった。^③小さな世界だった。

毎日一〇分ほどの道を歩いて学校へ通い、放課後は、校庭で一〇人ほどの仲間と遊ぶ。町から外の世界へ子どもたちが出るのは、都会に住む親戚を訪ねるときくらいで、それも年に一、二回のことだった。それが当時のわたしにとって世界の全てだった。にもかかわらず、時が過ぎわたし自身が大学へ進むために故郷を離れて、以降、その町を訪れたことはあっても、昔の友人や町の人たちと会うことはなくなっていた。それから三〇年が過ぎた。否、今から思えば、小学校から中学校、高等学校、そして大学へと進むなかで、新しい世界や新しい友人との出会いに夢中になり、そうした古い知り合いと過ごす時間は随分以前からずつと減っていたのである。もちろん、当時はそんなことを考えることさえなかったのだが。

小学生だった当時、そんな小さな世界で何を空想していたのか。今となつては思い出すことさえできない。ただ少なくとも、その町を出て行くことを空想していたわけではない。そのことだけは確かな気がする。そこは愛するものすべてがいる、わたしにとってかけがえのない場所だったのだから。裸足で鬼ごっこに興じた春休みや、真っ黒になるまで浜辺で遊んだ夏休み。時間は無限にあるような気がしていた。それは子どもだったわたしにとって永遠に終わらない時間だった、はずだった。外という世界を知るまでは。

(中略)

「春樹、もう行っちゃったかな？」と、朝、布団の中でもぞもぞしながら半ば独り言のように息子が呟いたのは、上高地から帰って来て間もない日曜日のことだった。四月で小学校四年生になる。春樹というのは、その日、埼玉へ引越しをする友達のことだった。二年生の時から一緒に少年野球をやっていて、以降、学校も一緒、野球も一緒と、一番仲のよい友達となっていた。「まだじゃないか。『お昼頃』って、春樹の父さんが言ってたから」と言うわたしに、息子は返事もせず、そのまま「トイレ」と言つて洗面所へ歩いていった。

飼っていたカメを不注意で死なせた日「いっそほくが死んだ方がましだ」と父の胸で泣いた息子だった。それが随分と大きくなつた。

二年近く前のことだった。家の近くの小さな店でカメに魅せられた息子は、家に帰ってから「カメ、飼っちゃダメなんだよね」と、自分を納得させるように、

A

「気持ち伝えるために、何度も「ダメなんだよね」と母に訊いた。父の許可を得ることを条件に、カメを飼ってもいいと言ったのは、そんな息子がかわいそうになった母だった。そのとき父は「ちゃんと世話はしろよな」とだけ言った。その日から、^⑤息子はカメに夢中になった。食べるものは雑食だが、好みがあるので、いろいろと試してみなくてはならないこと。水も必要だが、息をするために、鼻を空気に出すことのできる^{おおいし}置石をしなくてはならないこと。皮膚病になりやすいので、三日に一度水を変え、日光浴をさせなくてはならないことなど、など。まだ、ひらがなもうまく読めないのに、近くの図書館で借りてきた本の絵や写真をじっと眺め、それでもわからないところは母の助けを借りて一つひとつを調べていった。

生まれて二ヶ月ばかりの小さなカメが家に来た日「まず、名前を付けなくちゃね」と言う母に「ぼく、もう決めてた。カメ吉だよ。カメだから、カメ吉。わかってないね、母さんは」と息子は

B

鼻を鳴らした。それからの彼は、晴れている限り、カメの水槽を戸外へ出し、日光浴をさせ、餌^{えさ}を与えた。そして夏休みの自由研究にすると行って、毎日の体重を計った。

よく晴れた夏の日だった。息子は、友達との遊びに夢中になって、日光浴のために日向^{ひなた}に出したカメの水槽を取り込むことを忘れた。息子は「父さん、カメを殺したのは、ぼくだ。死なすくらいだったら飼うんじゃない」と、声を上げて泣いた。そんな彼にどんな言葉をかけてやることもできなかった。ただ抱きしめてやることしかできなかった。以降、あんなに毎日していたカメの話を息子がしたことはない。

しばらくすると、トイレの中から歌声らしきものが聴こえてきた。音程もリズムもめっちゃよかった。トイレから出てきた息子が言った。「おれ、春樹と同じ中学へ行って野球やるからいいや。いいでしょう、父さん」と。

時代は違いますが、四〇年も昔に「少年」として彼と同じ道を歩いてきた者として、わたしは、今の息子のその思いが叶う可能性が限りなく低いことを知っている。春樹が引越しの挨拶^{あいさつ}を兼ねて最後に我家へ来た日、「一人で電車に乗れるようになったら、泊まりに来いよな」と言うわたしに、息子は「よっしゃ」と叫び声を上げ、「春樹はすぐ来れるよ。だって、あいつ、頭がいい

から」と言った。春樹はうれしそうに肯いた。それでもやがて、二人には新しい友達ができ、新しい友達と新しい環境の中で、少年は夢中で生きていくことになる。そのことを、わたしは知っている。だからこそ、わたしは、今の息子たちのその思いを大切に抱きしめて欲しいと思った。息子が、そして春樹が大人になったとき、きっとそうしたことを思い出す日が来るに違いないと思うから。

(山本太郎「雪の上高地」による)

(注) ○上高地は長野県西部、飛騨山脈南部の梓川上流の景勝地。中部山岳国立公園の一部であり、国の特別名勝・特別

天然記念物に指定されている。標高約一五〇〇メートル。

問一 傍線部①「羅針盤を準備する」とは、具体的にはどのような行為を指していますか。最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号

13

- ① 現在の自分がどのような土地にいるのかを、独りで考える。
- ② 無性に独りになりたがる自分に対して、その言い訳をする。
- ③ 独りになり、今後自分が進むべき方向について考えてみる。
- ④ 現実の風景を見ながら、独り心象風景を空想のまま旅する。

問二 傍線部②「みんなは三十四の瞳ですね」とは、瀬戸内の小さな村を舞台とした小説『二十四の瞳』を踏まえた言葉ですが、その作者として最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 14

- ① 野上弥生子 ② 壺井栄 ③ 住井すゑ ④ 幸田文

問三 傍線部③「小さな世界」とありますが、具体的にはどのような世界ですか。最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 15

- ① 町の中のどの家も、縁側に面した道路から家の中が丸見えになるような、狭い土地に存在していた世界。
② 家族の名前一つでこの誰と分かって受け入れられるような、密接な人間関係で構成されていた世界。
③ 都会からの帰省者や地元民以外の人間の訪れる機会が少なく、外の世界との交流が乏しかった世界。
④ 町全体の人間がみんな縁続きの一族であり、一つの大家族のような人間関係で構成されていた世界。

問四 傍線部④「はずだった」と筆者が付け加えているのはなぜですか。その理由として最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 16

- ① 子どもだった自分にとって、住んでいた町を出て行くことは空想に過ぎなかったから。
② 永遠に終わらない時間だった、と思っていたのは自分ではなかったような気がしたから。
③ 外という世界を知ることによって、子どもの頃の記憶はすべて消えてしまったから。
④ 子どもだった自分にとっては、その当時生きていた世界がすべてであったから。

問五 空欄

A

と

B

を補うのに最も適当な組み合わせを一つ選びなさい。

解答番号

17

- ① A なんととても諦めない B 不満そうに
- ② A もうすでに諦めている B 満足そうに
- ③ A ようやく諦められた B 不安そうに
- ④ A それでも諦められない B 得意そうに

問六 傍線部⑤「息子はカメに夢中になった」とありますが、その結果、「息子」が得た知識としてふさわしくないものを一つ選びなさい。

解答番号

18

- ① 雑食であるため、動物性の餌も植物性の餌とともに食べること。
- ② 食べるものの好みを知るために、試行錯誤が必要なこと。
- ③ 水は必要だが、水の中に長い時間いることを好まないこと。
- ④ 日光浴や水槽の水の交換によって、皮膚病を防ぐ必要があること。

問七 傍線部⑥「わたしは、今の息子のその思いが叶う可能性が限りなく低いことを知っている」とありますが、それはなぜですか。最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号

19

- ① 少年は成長していく過程で次々と新しい世界や新しい友人に出会うものであって、「息子」も「春樹」もやがてその時その時の新しい環境でそれぞれ夢中に生きていくのだと分かっているから。
- ② 少年は成長していく過程で興味を引かれることがいろいろと変わるものであって、「息子」も「春樹」も中学に行ってからずっと野球をやっているとは限らないと分かっているから。
- ③ 少年は成長していく過程でどんな過去のことは忘れていくものであって、「息子」も「春樹」もお互いすぐに相手のことは忘れてしまい、それぞれの趣味ができるものだとか分かっているから。
- ④ 少年は成長していく過程で自分の思いが叶わないことがたくさんあるのだと知るものであって、「息子」も「春樹」もそうして知った感情を抱いて生きていくのだと分かっているから。

問八 この文章で筆者が述べていることと、明らかに合致しないものを一つ選びなさい。

解答番号

20

① 小学一年生の時、筆者たちの引き起こした事件の記憶はすでにあいまいであり、その記憶に残る光景が当時のものであるかどうかは、今は筆者自身にもわからない。

② 筆者自身が大学に進むため故郷を離れたことによって、それ以降、昔の友人や住んでいた町の人たちといった古い知り合いと過ごす時間は徐々に減っていった。

③ 夏のある日に、日向に出した水槽を取り込むことを忘れたために夢中になっていたカメを死なせてしまった「息子」は、その後二度とカメの話をすることはなかった。

④ 「息子」は、一番仲のよい友達が引越しのため離れていってしまうことに対する感情を、その友達と近い将来再び一緒に過ごす方法を見つけることで整理していた。